

比較幼児教育思想の試み (その2)

— 倉橋惣三 と 東基吉 —

下山田 裕彦
(静岡大学)

はじめに

私は昨年の保育学会で次のような口頭発表をした。

御存知のごとく、倉橋惣三(1882-1955)も城戸隆太郎(1893-1985)も日本の保育学会にそびえ立つ代表的な保育研究者であり、同時に実践者でありました。保育の思想に関心をもつ人なら、このあ二人の提起する問題をじっくりと検討することが必要とされます。この二人の研究業績に敬意を表しますが故に、私は両者の思想の比較に関心を持つようになりました。

倉橋にしろ、城戸にしろ、全容を明らかにする作業は実に困難な課題である、と言ってよいでしょう。その困難な課題である作業を十分承知しつつ、倉橋と城戸の思想の比較という作業をしてみようと思います。

ところで、問題もみつめている眼、その立っている場、その問題の取り上げ方とその処理の仕方……とそれぞれが実に対照的な倉橋と城戸の思想の比較は可能なのでしょうか。比較するからには何か比較する物差しが必要であります。又、何のために比較するかについても答えねばならないでしょう。

「比較は、他者との対話であり、自己(あるいは特定の思想)の対象化であり、比較において新しい自己発見をもつと共に、革新への起爆要因と新しい成長発展への展望を与えられるのである」(『比較思想のすゝめ』181ページ)との武田清子氏(国際基督教大学名誉教授)の言葉を私は、今思い出します。

倉橋と城戸の思想の比較を通して、もう一つ別の幼児教育の思想の展望を試みてみたいと思います。

次に、二人の人間観の中に人間のもっと深刻な部分、あるいは影の部分の理解がみられるかどうか、ということも比較の物差しにしてみたいと思います。……次に「超越の世界が視野に包みこまれた思想であるかどうかを思想の

比較の物差しにしてみたいと思います。……次に、社会の小学生格という視覚から二人の思想の比較も考察してみたいと思います。これを倉橋と城戸の生きた社会全体をっかんしている思想かどうか(大塚久雄『社会科学の方法』91ページ)というふうに言い換えてもよいかと思っています。……

この度の発表において、私は倉橋惣三と東基吉(1872-1958)の思想の比較をしてみることとする。さて、東はどのような人物でいかなる生涯を送った幼児教育者であったのだろうか。

(一)

水野浩志氏は東の人と思想も次のごとく叙述している

明治後期におけるフレーベルの思物中心主義保育に鋭い批判のメスを入れ、伝統的な形式主義保育の革新を促した教育者、……彼は得意の語学力を駆使し、フレーベルの『人間教育』を初め、欧米の新しい理論の吸収に努めた。そして、しだいに日本の幼稚園教育の形式主義に対する疑問を深め、思物主義保育の批判を試み始める。当時、彼の見解は余りにも革新的で、容易に一般保育界には容認されなかった。明治34年、「フレーベル会」の機関誌『婦人と子ども』が創刊されるや、彼はその編集責任者となって、新しい彼の保育論を誌上発表し、その啓蒙に努めた。

明治37年『幼稚園保育法』を出版。このなかで彼は思物使用法という従来の形式主義を徹底的に批判し、思物にかかわって、幼児の自己活動も最も重視する遊戯の価値を強調し、幼稚園の保育事項中、最も主要な地位を占めべきものとした。この本は日本人によって書かれた、初めての体系的保育論であり、その後の幼児教育論の先駆的役割を果たした。(『幼児保育小辞典』184ページ)

これも同じく水野浩志氏の倉橋の人と思想についての叙述と比較することによりしよう。

(二)

大正、昭和にわたり、約40年間、わが国保育界の指導者として、児童中心の進歩主義保育を推進した幼稚園教育界の魁人。…明治43年、東京女子高等師範学校講師となり、保育雑誌『婦人子ども』の編集を担当。講習会、講演も通し、「新保育」の理論を発表。大正6年、同校教授兼同校附属幼稚園主事となり、本格的な新保育の実践にあたることとなる。大正9年から11年まで欧米に留学し、児童中心主義の新保育理論および実践から多くのことを学ぶ。彼は体系を追った抽象的な叙述を好まず、常に極めて具体的で、情味あふれた文章で人間の心情に訴えた。

幼児保育の真髄は、子どもとして充分子ども自身の生活を満喫させることにあり、子ども自らの自己充実を援助するような環境を整え、子どもの必要に応じてその自己充実を誘導し、あるいは教導するものでなければならぬというのが彼の根本思想であった。子どもの自己活動も何よりも重んじ、抑圧的、形式的、画一的な諸主義の教育を排斥し、とりわけフレーベルの恩物中心主義の伝統的保育を排斥し、真に子どもらしい、子供の「生活の中で、生活も、生活にまで尊く」ことも強調した。(前掲書、171ページ)

倉橋と東には多くの類似点がある。そのいくつかを列挙してみよう。

1. 倉橋も東も東京女子高等師範学校附属幼稚園に深く関わった。
2. 幼稚園教育の形式主義に反対した。
3. 恩物主義保育を批判し、子どもの遊びを保育の中心とした。

類似点と同時に相違点をも明らかにすることが比較には大切である。

(三)

次に、比較とはどういうことであろうか。比較には、類似と相違点を明らかにし、それが何に起因するかの理由を確認することが必要である。

次のような一節の重要性が浮かび上がってくるであろう。

比較するとは一つ、あるいは、若干の相異なる社会状況から、一見してそれらの間に一定の類似性があると思われれば二つあるいはそれ以上の現象を選び出し、選り出された現象それぞれの発展の道筋をあとづけ、それらの間の類似点と相違点を確定し、そして可能な限り類似および相違の生じた理由を説明することである。したがって、丁度的に言えば、比較がおこなわれたためには、二つの条件が必要である。すなわち、観察された諸事実の間に一定の類似性があるしなければならないこと、さらに、その諸事実が生み出された状況の間には一定の相違があるなければならないことである。(『比較思想のすすめ』180-181ページ)

武田清子は比較の指標も次のように指摘する。

1. 神観の問題から — これは、神観、天概念、あるいは、人間を超えた「超越的なもの」がその「思想」に含まれているかという問題である。
2. 人間観の問題から — 人間の本性、その善と悪の把握の仕方、宗教的意味においていうならば、罪と救済の問題の考え方が内包されているであろう。
3. 社会関係、社会的結合の特質の問題から。

倉橋と東の保育思想の比較を通して、今日の保育思想のあり方が浮かび上がってくるであろう。

参考・引用文献

- 小泉仰也編『比較思想のすすめ』こころ社出版、1979年
- 岡田正章編『幼児保育小要』日本しふり、1979年
- 下山田裕彦著『幼児保育の基礎理論』理想社、1979年
- 下山田裕彦他著『幼児教育の思想』川島書店、1974年